

関西大学考古学研究室
開設五拾周年記念

考古学論叢 抜刷

平成十五年十二月発行

北インドの精製土器（II）

——北方黒色磨研土器を中心として——

上
杉
彰
紀

北インドの精製土器（II）

——北方黒色磨研土器を中心として——

上 杉 彰 紀

一 はじめに

北インドでは、前二千年紀後半以降、前一千紀末にいたるまで黒・灰色系精製土器が展開した。時空間軸上において異なる精製土器が消長しており、当該時期の北インドの土器様式を特徴づけている。

本稿では、黒・灰色系精製土器のうちNBPW（北方黒色磨研土器）の変遷を検討する^①。このNBPWは一九四六年にM・ウィーラーとクリシュナ・デーヴァがその存在に注意を喚起して以降^②、前一千紀の北インドを特徴づける土器として注目され、特にその分布が北インドを中心として、インド亜大陸各地に広がることから、マウリヤ朝によるインド亜大陸の政治的統一と関連づけられるなど、当該時期の歴史を考える上でも一つの鍵になると期待されてきたものである。また、近年の発掘調査によって、北インドにおける都市成立前後の時期に展開した土器であることも明らかになっている。

しかし、こうした歴史上の重要性にもかかわらず、現状では十分な検討がなされているとはいえない。土器が持つ編年上の役割はいうに及ばず、NBPWの起源と展開、さらには衰退のプロセスを明らかにすることはこの土器の歴史上の意義を考える上で基本的な作業であろう。本稿ではその準備段階として各地の遺跡出土のNBPWを取り上げ、若干の検討および考察を行なうこととしたい。

第1表 北インド編年表

(上段の数字は以下の通り。1 = ガンジス川上流域、
2 = ガンジス川中上流域、3 = ガンジス川中流域、
4 = ガンジス川中下流域、5 = ヒマラーヤ山脈南麓)

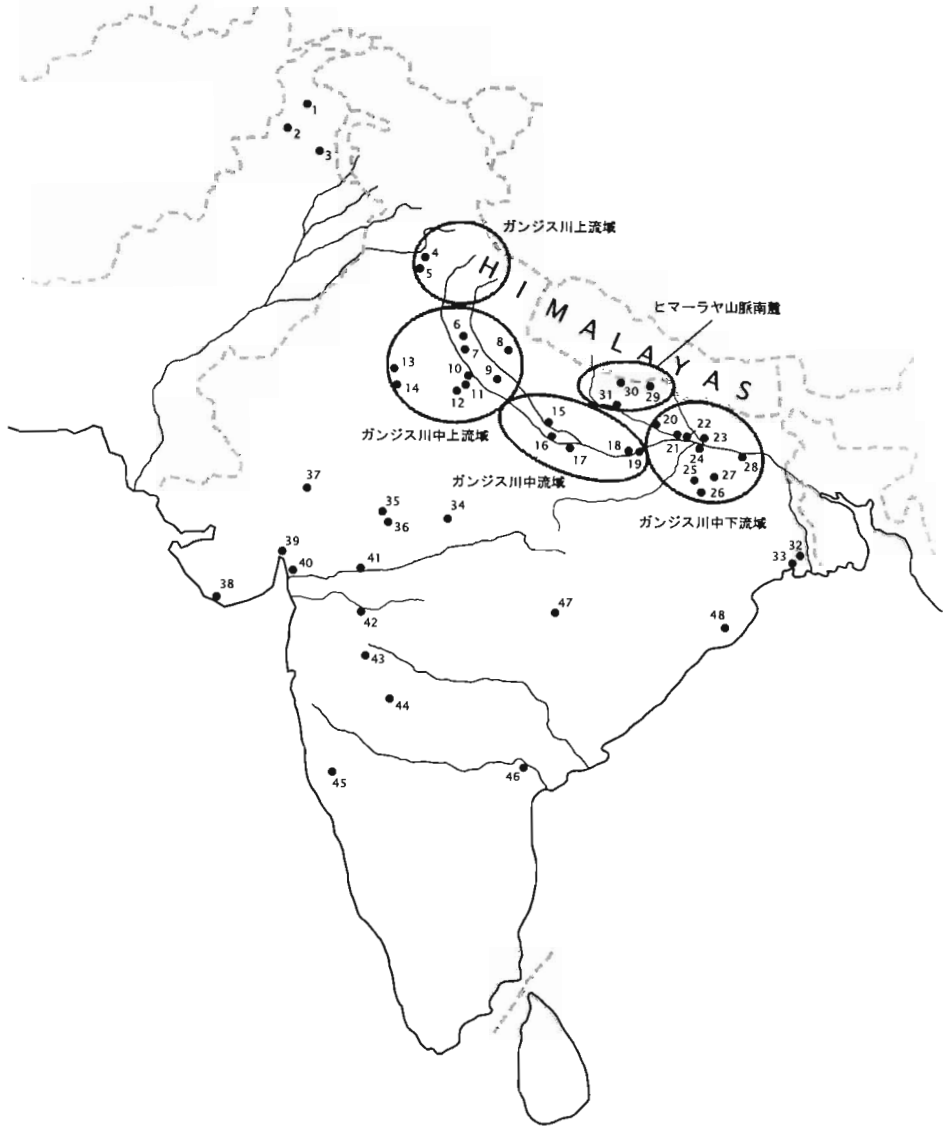
北インド編年	1	2	3	4	5
700AD	VII期 ポスト・グプタ朝以降				
500AD	VI期 グプタ朝併行段階				
AD	V期 クシャーン朝併行段階				
500BC	IV期 NBPW後期				
1000BC	III期 PGW後期		NBPW前期		
	II期		BRW・BSW後期 (鉄器導入期)		
	I期		鉄器の出現 BRW・BSW前期 (金石併用期)		
1500BC	ハラッパー文化	断絶	?	新石器文化 (BRW)	?

二 北インドにおける精製土器の変遷

北インドにおける黒・灰色系精製土器としては、PGW(彩文灰色土器)、BRW(黒縁赤色土器)、BSW(黒色スリッパがけ土器)、さらにNBPWがあり、これらの土器は地域的なまとまりを持ちながら時間軸上を推移したことが明らかになっている(第一表)^④。一方で、それぞれの土器の間には相互の影響関係がみられ、独立した形でそれぞれの土器が消長したわけではない。本節では、NBPWも含めた精製土器の変遷過程の概略について筆者の考えをまとめておくことにしよう。^⑤

北インドでは、前三千年紀後葉もしくは前二千年紀初頭頃にはインダス川流域を中心とするハラッパー文化の影響が及んだが、ハラッパー文化の衰退とともに、狭域型の文化が各地に成立する。ガンジス川上流域のローパル・バラ文化、ガンジス川中上流域を中心とする赭色土器(OPC) II埋蔵銅器文化、ガンジス川中流域・中下流域に展開した新石器文化などがある。直接的にはそれらの文化の間の交渉は乏しく、仮に文化間の相互関係が存在したにしても文化的な統合の方向性はみられない。

こうした状況の中で前二千年紀後半にはガンジス川上流域にPGW、ガンジス川中下流域から中上流域にはBRW・BSWが出現する。PGWとBRW・BSWは互いに交渉を持ちながらも、地域を隔てて展開し、前一千紀前葉にはガンジス川上流域から中上流域にPGW、ガンジス川中流域・中下流域、ヒマラーヤ山脈南麓にBRW・BSWというように、北イ



- | | | | |
|-------------|----------------|------------------|--------------|
| 1 ウデグラーム | 14 バイラート | 27 ビブラフワー・ガーンワリア | 37 ナガラ |
| 2 チャールサダ | 15 シュリンガヴェーラブラ | 28 サヘート・マヘート | 38 ブローチ |
| 3 タキシラー | 16 カウシャンビー | 29 アヨーディヤー | 39 マヘーシュワル・ |
| 4 ローバル | 17 ピータ | 30 チャンドラケートウガル | ナウダートリ |
| 5 サンゴール | 18 ナルハーン | 31 タムルク | 40 ブラカーシュ |
| 6 ハスティナーブラ | 19 マーンジー | 32 ヴィディシャー | 41 ネヴァーサ |
| 7 アッラーハブル | 20 チランド | 33 ナーグダー | 42 テール |
| 8 アヒッチャトラー | 21 ヴァイシャリー | 34 ウッジャイン | 43 コールハブル |
| 9 アトランジーケラー | 22 パータリプトラ | 35 アハール | 44 アマラーヴァティー |
| 10 マトゥラー | 23 ソンブル | 36 ソームナート | 45 パウニ |
| 11 ソーング | 24 タラディー | | 46 シシュパールガル |
| 12 ノー | 25 ラージギル | | |
| 13 ジョードブラ | 26 チャンパー | | |

第1図 NBPW 出土主要遺跡分布図

ンドを二分して分布するにいたる。こうした地域性を背景として前一千年紀中葉にはBRW・BSWの分布域にNBPWが成立し、PGWとNBPWが北インドを分けて分布するようになる(第一図)。

精製土器の地域性は前一千年紀後葉に消失するが、地域性の消失と連動して各種の精製土器が衰退・消滅していくことになる。前一千年紀後葉は土器様式の解体・再編の時期で新旧の要素が段階的に交替していくが、前一千年紀末あるいは後一千年紀初頭には前代の黒・灰色系精製土器を欠いた新たな土器様式が成立する。

このように、前二千年紀後半から前一千年紀後葉にかけて展開した黒・灰色系精製土器は、時間的・空間的に明確な位置を占めながらも、互いに相互関係を持ちながら推移した。その背景には、精製土器が置かれた社会的状況が存在していることが予測され、NBPWもまた何らかの社会的背景のもとに生み出されたものと考えられる。

ところで、NBPWに関しては、M・D・N・サーヒ氏^⑥やT・N・ロイ氏^⑦らの研究によって、前・後二時期に細分する案が提示されている。それは主にNBPWの精粗や共伴する赤色系軟質土器の形式によって分けられたもので、前期には精製のものが後期には粗製化するとされ、黒・灰色系精製土器の衰退期とされている。この二時期区分は北インド各地の発掘調査によって層位的に追証されている(以下NBPW前期・後期とする)。この二時期区分は編年の大枠として有効ではあるものの、粗製化あるいは精製土器の衰退の過程は十分に明らかにされておらず、NBPWを含めた精製土器の衰退・消滅過程を解明するためにはどのような段階を経てNBPWが粗製化していくのか明らかにすることが必要であろう。本稿ではこうした問題意識のもと、遺跡出土資料の検討を中心に、NBPW出現以降の精製土器の変遷について若干の整理を行ない、今後の検討の方向性を示すことを試みたい。

三 北インド各地の遺跡出土資料の検討

本節では、北インドおよび北インド周辺地域の各遺跡で出土しているNBPWについて検討する。一九八六年の段階でロイ氏によってインド・ネパールにおけるNBPW出土遺跡が集成され、四一四の遺跡が挙げられているが、北インドを中心に分布し、インド半島南半部を除く各地で散在的に分布が確認されている^⑧。また、現在のバキスタンに含まれる北西インドでも出土が報告されている。

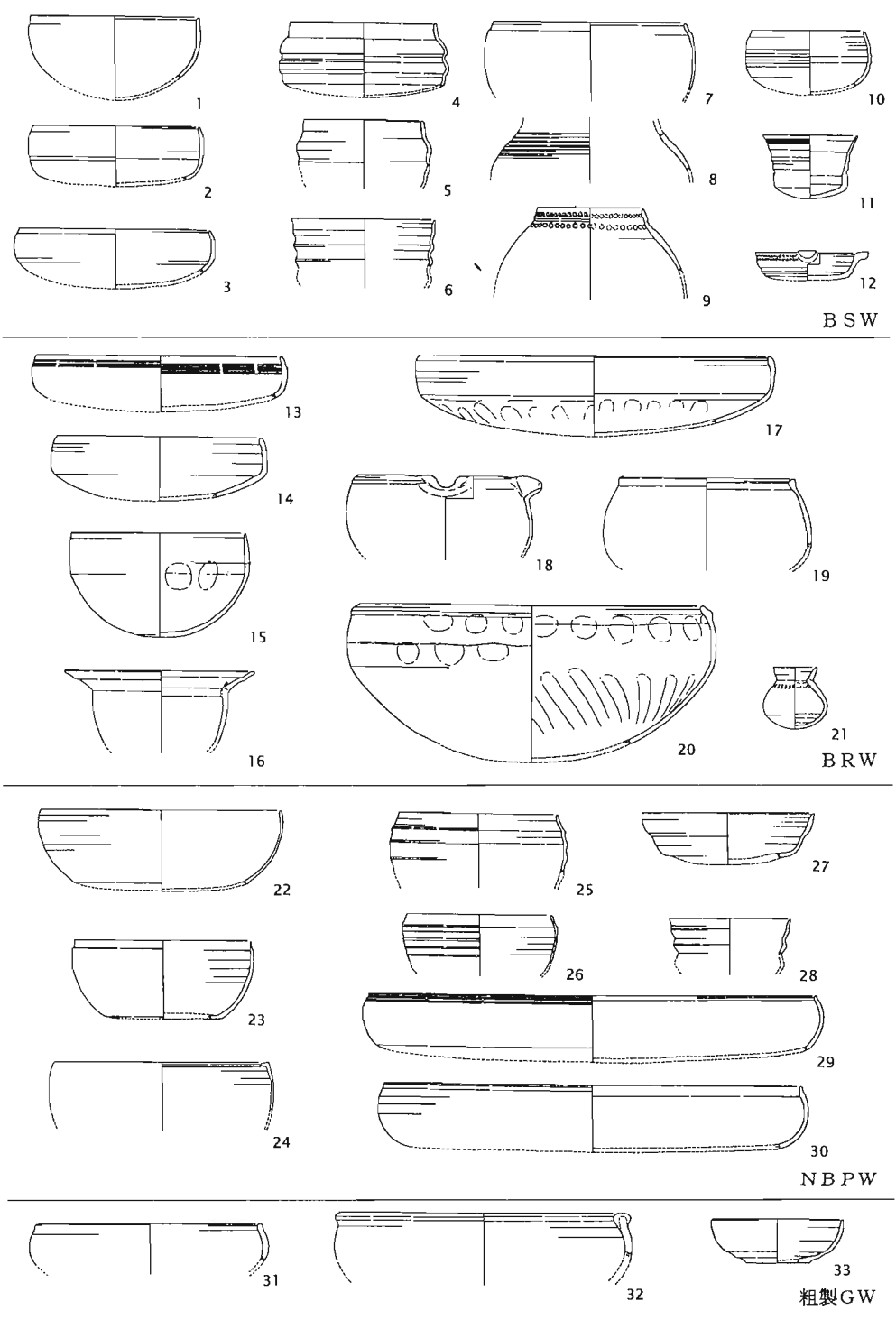
ここで取り上げるのは、良好な資料が出土している遺跡のうち、筆者が実見することができたもの（マヘート遺跡、ハステイナープラ遺跡、ローパル遺跡）、および報告書に掲載・記載された資料（上記以外の遺跡）によってその内容が明らかになるものである。

①マヘート遺跡（第二図）

ヒマラーヤ山脈南麓地域に位置するマヘート遺跡では、II期がNBPW前期、III期がNBPW後期に相当する^⑨。また、NBPW前期に先行する可能性のある文化層（I期）がA地区において確認されている。ただし、概報でも述べられているようにI期の画定にはいくつかの問題があり、ここではI・II期を一括して捉えておくこととしたい。

まずII期のNBPWについては器壁厚が二〜三ミリと薄く、かつ一個体内で均一な厚さに仕上げられている。表面調整はきわめて丁寧で器表面は平滑に仕上げられ、器表面に特有の光沢を持つ。また、胎土は緻密で、還元焰によって硬質に焼き上げられている。器種としては、皿（二九・三〇）・半球形鉢（二二〜二四）を主体として、波状鉢（二五〜二八）や半球形鉢に伴うと考えられる蓋などが出土している。施文が行なわれる例は確認されていない。

この時期のNBPWの皿は体部が丸く湾曲する器形を特徴としている（このような器形を仮に皿Aとする）。半球形鉢は



第2図 マヘート遺跡出土の土器 (1:6)

口縁部形態によってA、Cの三形式に大別できる。半球形鉢は口縁部が体部から屈曲することなく伸び、端部を丸くおさめるA形式(二二二)、体部と口縁部の間に段をつくるB形式(二二三)、口縁部が体部から明確に屈曲して内向するC形式(二二四)からなる。

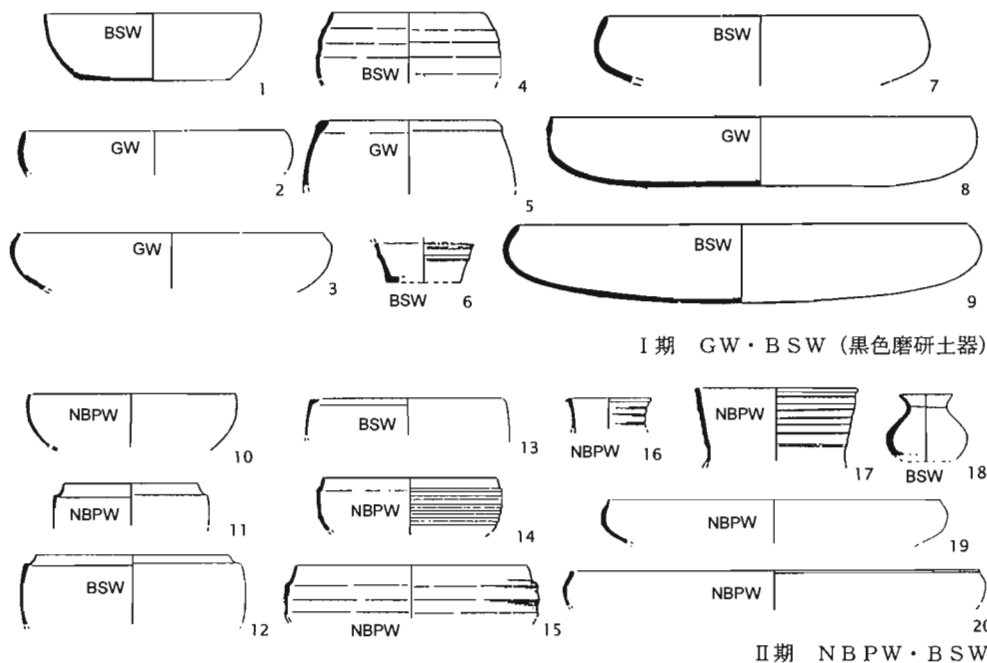
I・II期のBRW・BSWについてみると、BRWは断面の観察によると酸化焰焼成によって赤色系の色調を呈するものが多く、NBPW・BSWに比較すると焼成が甘いものが多い。BSWは還元焰焼成により断面灰色を呈しており、BRWに比較すると硬質である。BRWは皿(一七)・半球形鉢(一五)・浅鉢(二三・一四)・玉縁口縁広口鉢(二八・二〇)・鏝状口縁鉢(二六)・小形壺(二二)などからなり、BSWは半球形鉢A・B(一七)・波状鉢(四・六)・浅鉢(二・三)・壺(八・九)、小形鉢(二〇・二二)を主体とする。注意されるのは、BSWにのみ波状鉢が認められる点と限定的ながら凹線文や刺突文・円管文などによる施文が行なわれる点である。BRWは器種・器形・調整技法などの諸点においてNBPWとの差異が顕著であるのに対し、BSWにはNBPWに共通する波状鉢・半球形鉢Bが認められる^⑩。

III期になると、NBPWは一定量存続するようであるが、GW(灰色土器)が顕著となる。この時期のGWは胎土・器壁厚・表面調整などの点でNBPWに比較して明らかに粗製化している。胎土には砂粒・シャモット粒が含まれるものが多く、器壁は五ミリ前後と厚手で、器表面は調整が粗く平滑性は低い。器種は皿(三二)・半球形鉢・玉縁口縁広口鉢(三二)と、II期の精製土器に系譜を持つもののほか、同時期の赤色系軟質土器に共通する平底浅鉢(三三)や広口壺など新たな器種もみられるようになる。

②ガーンワリア遺跡(第三図)

ヒマラーヤ山脈南麓のガーンワリア遺跡では、I期がBSW主体化段階、II期がNBPW前・後期に相当する^⑪。

I期にはNBPWがなく、黒色磨研土器、GW、BRWが精製土器として確認されている。報告書で黒色磨研土器とされ



第3図 ガーンワリア遺跡出土の土器 (1:6)

た土器はBSWの範疇で捉えられ、この土器とGWが主体となっている。器種としては、黒色磨研土器・GWともに皿(三・七〜九)、半球形鉢A(一・二)を主体とし、黒色磨研土器にのみ波状鉢(四)・小形鉢(六)が確認されている。皿の器形はNBPWの器形に近く、体部の湾曲の度合いが強く丸みを帯びたものとなっている。報告書の記載によると、黒色磨研土器およびGWの器壁はII期のNBPWよりも薄いとされている。

II期にはNBPWが出現しており、皿A(一九・二〇)、半球形鉢A(二〇)・B(二一)、波状鉢(一四・一五)、玉縁口縁広口鉢、直口壺(一六・一七)から構成される。BSWも伴出しており、皿、半球形鉢A・B(一二)・C(二三)、玉縁口縁広口鉢、波状鉢、小形壺(一八)が出土している。赤色系軟質土器にNBPW後期の形式が一部含まれることから精製土器の一部にもNBPW後期のものが含まれる可能性があるが、公表された実測図から判断する限り、NBPW前期の特徴を示すものが多い。

③ ラージガート遺跡 (第四図)

ガンジス川中流域に位置するラージガート遺跡では、BSW主体のIA期、NBPW前期に相当するIB期、NBPW後期に措

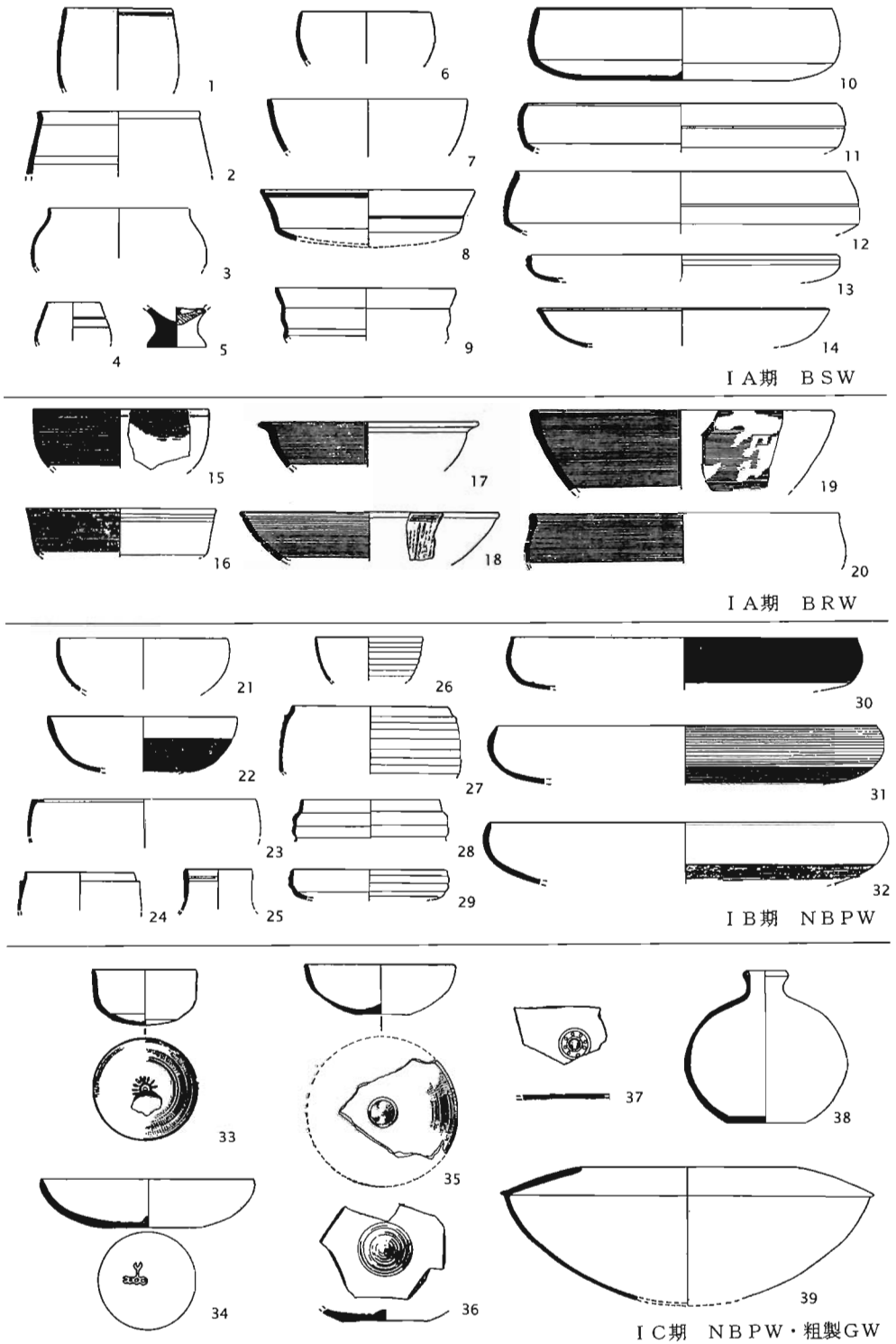
定されるIC期が確認されている。^④

IA期では、BRWも伴出するが、主体となるのはBSWで、皿(一〇～一四)、半球形鉢A(六・七)、長胴鉢(一・二)、浅鉢(八)、波状鉢(九)が確認されている。皿は底部と体部の境界に明確な屈曲部をつくり、体部は緩やかに湾曲しながら内向する器形を呈し口縁部が短く開くもの(一〇～一二)が中心で、浅皿状のもの(一三・一四)も出土している。前者には体部外面中央に凹線を一条施すもの(一一・一二)や底部内面に断面三角形の突起を持つもの(一〇)などもみられる。浅鉢や長胴鉢は、前二千年紀の後半段階でBRW・BSWに共通してみられる器種・器形である(例えばナルハーン遺跡I期、アトランジーケラー遺跡II期など)。また低平な脚部を持つ底部(五)も出土しているが、これも古い要素である。波状鉢は体部の凹凸が緩やかで外傾して開く体部を持つ。BRWには半球形鉢(二五)や浅鉢(二六)、広口鉢(一七～二〇)が出土しているが、器形は単純でBSWとの差異が明瞭である。

IB期にはNBPWが主体となり、皿・半球形鉢・波状鉢・長頸壺(?)が出土している。皿は底部と体部の境界に屈曲を持たず、体部が丸く内湾し口縁部が短く外反するA形式が出土している(三〇～三二)。半球形鉢(二一～二四)はA～C形式が出土し、波状鉢(二六～二九)は体部が緩やかに内湾する器形を呈し、体部の凹凸が密なものを中心となり、浅鉢形のものも出土している。長頸壺(二五)としたものは緩やかに外反して立ち上がる頸部を持つ。

IC期はNBPW後期に相当し、厚手化したNBPWや粗製のGWが出土している。^⑤皿が含まれないのが特徴で、半球形鉢A(二三・三五)、浅鉢(三四)、キャリネット・ハンディー(三九)、短頸壺(三八)が出土する。半球形鉢には底部内面に中央の断面三角形の突起を中心にくぐる同心円状凹線文を持つものが出土している(三五・三六)。また、底部内外面にスタンプ文^⑥を施したのもみられる(三三・三四・三七)。

④ プラフラードプル遺跡



第4図 ラージガート遺跡出土の土器 (1:6)

ラージガート遺跡同様にガンジス川中流域に所在するプラフラードブル遺跡でも、ラージガート遺跡同様の様相がみられる。^⑩ IA期にはBSWを主体とし、BRWが伴う段階、IB期が精製NBPWが主体となる段階、IC期が粗製NBPWおよび粗製GWが主体となる段階である。

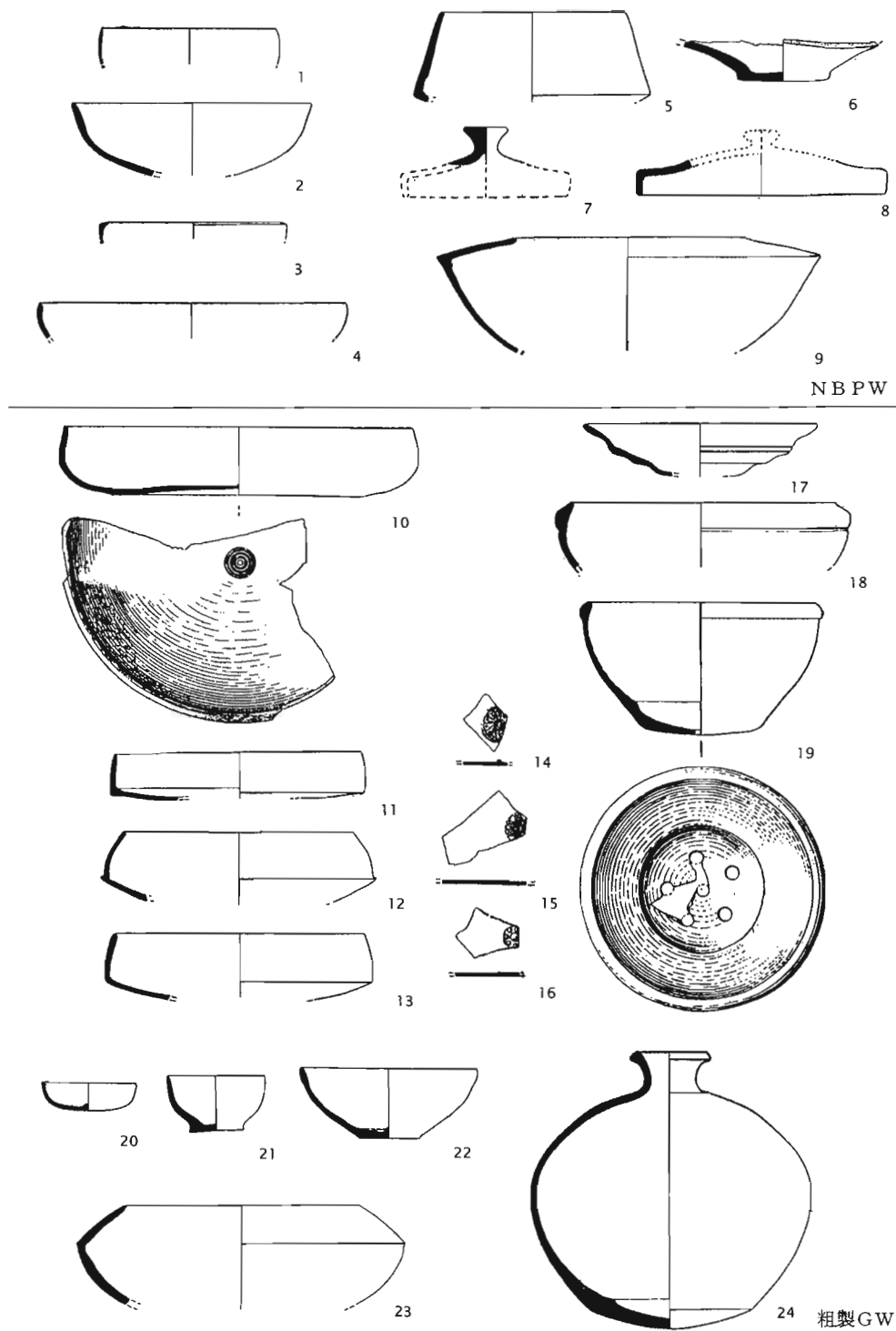
各段階の器種構成および器形的特徴もまたラージガート遺跡同様である。IA期ではBSWのみ凹線文を施す器種がみられ、BRWとの器形上の差異も顕著である。IB期のNBPWは、半球形鉢を主体とし、波状鉢が伴う。皿は報告されていない。底部内面に同心円状凹線文と突起を施すものは、IB期にはすでに存在するが、IC期に増加するようである。

⑤ハステイナープラ遺跡（第五図）

ガンジス川中上流域のハステイナープラ遺跡ではII期がPGW後期、III期がNBPW後期に相当する。^{⑩・⑪}

報告によると、III期から出土するNBPWには皿、半球形鉢A（一・二）・C（三）、キャリネット・ハンディー（九）、蓋（七・八）が含まれる（報告書では報告されていないが、波状鉢の破片も含まれることを資料の実見によって確認した）。資料を実見したところ、半球形鉢Aには、器壁厚が三ミリ前後の薄手のもの（一）と五ミリ前後の厚手のもの（二）がみられる。半球形鉢C（三）は器壁が五ミリ前後と厚く、口縁部の内側への屈折が緩い特徴を持つ。皿も半球形鉢同様に器壁厚が三ミリ前後の薄手のものと五ミリ前後の厚手のものがあり、前者はマヘート遺跡やラージガート遺跡出土例と同様に体部の湾曲が強い器形、後者は胴部最大径が体部下半にあり、体部が直線的に伸びる器形を特徴とする（以下、このような形態を仮に皿Bとする。五も口径は小さいが体部の断面形は類似する）。

このほかIII期からは粗製GWおよび赤色土器が出土している。GW・RWに皿が報告されているが、その器形にはNBPWの皿Bに類似するもの（一一〜一三）がみられる。さらにGW皿には体部最大径が体部下半に下がった下膨れ状の器形を呈するもの（一〇）があり、その底部には同心円状および車輪形のスタンプ文を施す（二四〜一六）。また、波状鉢（一



第5図 ハスティナーブル遺跡出土の土器 (1:6)

七)、細頸壺(二四)がGWに、キャリネット・ハンディー(二三)、玉縁口縁広口鉢(一八・一九)がGW・RWにみられる。

⑥ローパル遺跡

ガンジス川上流域のローパル遺跡では、II期にPGW段階、III期にNBPW後期の資料が出土している。²⁰

III期はA・B二時期に分けられており、A期からはNBPW全出土量の八五%が、B期からは一五%が出土しているときれ、NBPWの減少傾向が指摘されている。正式な報告書は刊行されていないが、ローパル考古博物館に収蔵される資料を
実見したところ、NBPWは、皿A・B、半球形鉢A・C、蓋、キャリネット・ハンディーなどで、特に半球形鉢A・Cでは、器壁厚が五ミリ前後と厚い。半球形鉢Cはハステイナープラ遺跡出土例同様に口縁部の屈曲がきわめて緩い。

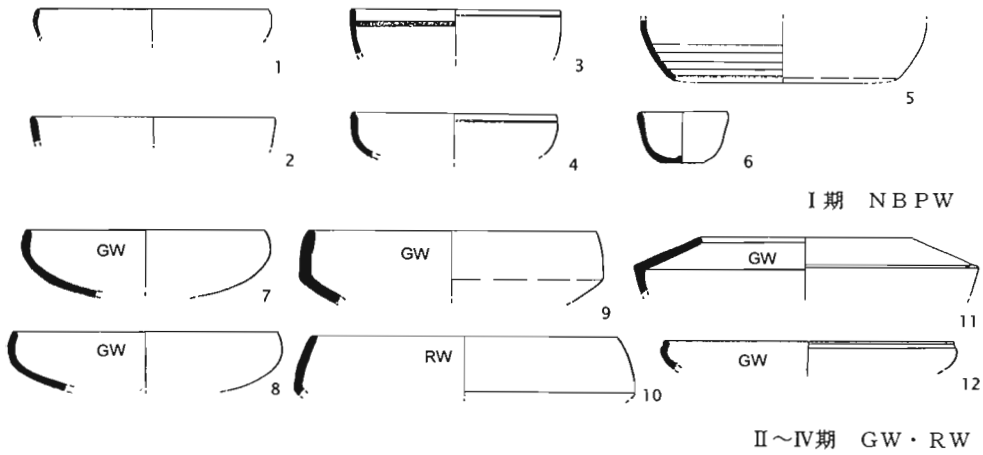
⑦タキシラー遺跡(第六図)

パンジャープ平原の北西縁に位置するタキシラー遺跡では、ビル・マウンド地区を中心にNBPW後期の資料が出土している。²¹

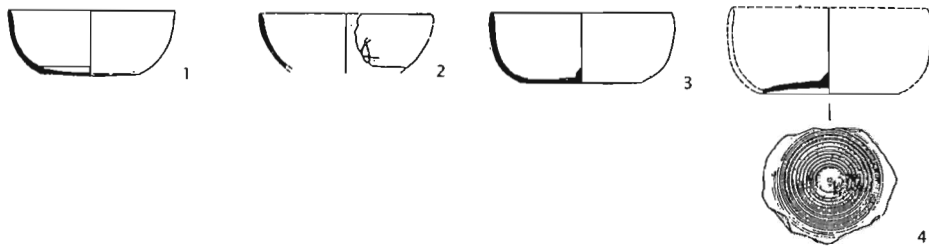
ここでは一九六七年に実施されたビル・マウンド地区の成果を中心に述べる。調査ではI～IV期が設定されているが、各期ともにNBPW後期に含めることができ、当該時期の土器変遷の具体相を追うことができる。NBPWはI期に限定的に出土しており、半球形鉢(一～六)が出土している。小形の半球形鉢(六)の底部内面には突起を設ける。II期以降はNBPWが出土せず、精製土器としてはGW・BSWが主体となる。これらは浅鉢(七・八)、皿A(一二)・B(九・一〇)、キャリネット・ハンディーを中心に出土しており、当該時期の北インド系土器に共通する。²² 前二～一世紀頃に措定されるIV期には完全に赤色化しているようである。

⑧シシュパールガル遺跡(第七図)

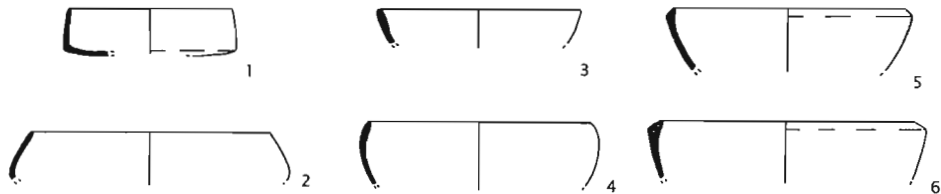
北インドの精製土器(II)(上杉)



第6図 タキシラー遺跡・ビルマウンド地区出土の土器 (1:6)



第7図 シシュパールガル遺跡出土の土器 (1:6)



第8図 プラカーシュ遺跡出土の土器 (1:6)

東インド（現在のオリッサ州
 プバネーシユワル市）に所在す
 るシシュパールガル遺跡では、
 I期（前三〇〇〜二〇〇年頃）、
 II A期（前二〇〇〜後一〇〇年
 頃）、II B期（後一〇〇〜二〇
 〇年頃）、III期（後二〇〇〜三
 五〇年頃）という時期区分が設
 定されているが、II期を中心に
 NBPWが三片と限定的ながら
 出土している²⁸。I期に報告され
 ている黒色磨研土器（一・二）
 も北インド系の精製土器の可能
 性を持つ。

この他にも、底部内面に突起
 および同心円状凹線文を施した
 半球形鉢（三・四）が黒色土
 器・GWを中心に出土しており、

他の遺跡の類例からみてNBPWかどうかの判断は別として北インド系の精製土器の可能性が高い。これらの底部内面施文土器は各時期から出土するとされ、黒色土器・GWのほかには赤色土器でも同様の施文例があるとされる。

⑨ プラカーシユ遺跡（第八図）

西インド（現在のマハララシュトラ州ドゥール県）に所在するプラカーシユ遺跡では、II期（前六〇〇〜一〇〇年頃）上層から主体を占めるBRWとともに一〇点のNBPWが出土している^②。出土しているNBPWは底部から鋭く屈曲して直線的に内向して立ち上がる体部を持つ浅鉢状の皿B（一・二）、半球形鉢A（三・四）・C（五・六）である。

四 NBPW前期・後期の土器変遷

本章では前章で検討した資料をもとにNBPWの編年について検討することにしよう。

まず、NBPW出現以前についてみると、ラージガート遺跡、プラフラードプル遺跡、ガンワリア遺跡など本稿で検討した遺跡に加えて、ガンジス川中下流域のナルハーン遺跡^②、マーンジール遺跡^②などでも、BSWが主体化する段階が確認されており、ガンジス川中流域・中下流域、ヒマラーヤ山脈南麓に共通して生じたものと考えられる。今回検討した遺跡では、BSWがBRWを数量的に圧倒するのに加えて、BSWにはBRWにはみられない器種・器形が登場している。こうした現象はBSWとBRWの差異化、すなわち両者の土器が異なる機能・意味を持つようになったことを示しており、この両者の差異化がBSWの主体化を引き起こした要因の一つと推定される。

NBPWは黒色を基調とした外観性や器形の共通性という特徴から、BSWを祖形としていえると考えられる^②。しかし、NBPW出現以後も客体的ながらBSWが存続していることや、マヘート遺跡の資料にみるようにBSWにはNBPWにはない加飾器種があることなどから、NBPWとBSWの間には何らかの機能・意味の差異がある可能性が高い。また、NB

PWとBRWについても器種構成の違いが顕著で、両者は補完的な関係にあると考えられる。

NBPWの検討によると、皿A、半球形鉢A・B・C、波状鉢を中心とする薄手の一群（マヘート遺跡II期、ラージガート遺跡IB期、プラフラードプル遺跡IB期、ガーンワリア遺跡II期およびハステイナープラ遺跡III期の一部）と、皿B、半球形鉢A・C、キャリネット・ハンディーなどから構成される厚手の一群（ラージガート遺跡IC期、プラフラードプル遺跡IC期、ハステイナープラ遺跡III期、ローパル遺跡III期、シシュパールガル遺跡IIA期、タキシラー遺跡ビル・マウンド地区、プラカーシュ遺跡II期）に分けることができる。また、後者には底部内面の突起十同心円状凹線文を施したものが広くみられるのも特徴である。この両群がすなわち「精製NBPW」と「粗製NBPW」にそれぞれ相当すると考えてよいであろう。したがって、いわゆる「粗製」の実態とは厚手化と器種・器形の変化、新たな器種の出現である。「精製」・「粗製」というNBPWの分類基準は必ずしも適切とはいえず、ここでは仮に前者をNBPW第一群、後者をNBPW第二群と呼ぶことにしたい。^⑩

以上の現象を時空間軸上に位置づけると、次のようになろう。

①第一段階 NBPW前期

B・S・W主体化段階を経て、胎土の緻密性、成形・調整技法の丁寧さ、薄手の器壁、焼成の堅緻さを特徴とするNBPW第一群が創出される。^⑪ ガーンワリア遺跡では、NBPWの出現に先行してNBPWの皿に類似する黒色磨研土器が多く出土しているが、あるいはラージガート遺跡やプラフラードプル遺跡よりも新しく、NBPWの出現直前に位置づけられる可能性がある。

この段階はガンジス川中流域・中下流域・ヒマラーヤ山脈南麓を中心に確認されている。今回検討した中ではガンジス川中上流域のハステイナープラ遺跡にNBPW第一群としたものが含まれるが、第二群が伴っており、第一群から第二群への

変化が截然と分かれるのか、両者が一時期にせよ併存しながら漸移的に変化していくのかという問題もあり、ハステイナー
プラ遺跡出土の第一群と第二群の関係については俄かに断じ得ない。ここではハステイナープラ遺跡も含めてガンジス川中
上流域以東へのNBPWの波及は続く第二段階を中心とする時期である可能性を指摘するにとどめておくことにしたい。こ
の第一段階に併行する時期のガンジス川上流域・中上流域にはPGWが主体的に分布する可能性が高く、この時期の北イン
ドは大きくは西のPGW分布地域、東のNBPW分布地域に二分されていたと考えられる。

②第二段階 NBPW後期

ある段階で器壁の厚手化、器形の変化、新たな器種の出現がみられるようになる。底部と体部の境界に明瞭な屈曲部をつ
くる皿B、キャリネット・ハンディーのように、第一段階には系譜を追うことのできない器形があり、NBPW内部の自律
的变化だけで理解できるかどうか判然としない。この変化の要因を理解するには、PGWの様相および粗製GWの出現が一
つの手掛りになる可能性がある^④。また、NBPW・GWに共通する特徴として、皿や鉢の底部内面に施文される同心円状凹
線文やスタンプ文の使用を挙げることができる。

また、ロイ氏も指摘するように、NBPW第二段階には粗製GWが増加する傾向がみられる。粗製GWはNBPW第二群
同様に厚手であると同時に、胎土・器面調整が粗雑化している。また、NBPWに共通する器種（皿、半球形鉢など）と赤
色系軟質土器（平底浅鉢、広口壺など）に共通する器種が存在することも粗製GWの特徴である。特にキャリネット・ハン
ディーはNBPW、粗製GW、赤色系軟質土器のいずれにも共通してみられる器種となっている。ここには、従来の精製土
器特有の器種構成が崩れていく状況をみることで、精製土器の衰退過程において生じた一つの現象として理解するこ
とができる。

この時期にはガンジス川中流域・中上流域、ヒマラーヤ山脈南麓だけでなく、ガンジス川上流域・中上流域や北西イン

ド・西インド・東インドという広範な地域にもNBPWが分布する。^④これらの北インド以外の地域でのNBPWの出土量はきわめて限られており、この段階における北インド系土器の拡散以後は、各地域とも在地の土器様式が成立していることから、北インド系土器が各地の土器様式に直接的に影響を及ぼしたり、土器様式を変容させることはないようである。

③第三段階 精製土器終末段階

本稿では詳述しなかったが、サヘート遺跡I期がこの精製土器終末段階に相当する。^⑤サヘート遺跡I期にはNBPW・BSW・GWが出土しているもののみわめて限定的であり、赤色系軟質土器主体の土器様相がこの段階にみられる。第二段階に新出した赤色系土器の器種が主体となって土器様式を構成しており、かつ続く段階（後一千年紀前葉）に安定して土器様式の構成要素となる要素が加わっている。この段階は連続する文化層序が調査されたソーンク遺跡でも確認できる。^⑥

従来のNBPW時期区分論では編年的指標としての前・後二段階に分けるにとどまっていたが、特にNBPW後期に関してはNBPWにとどまらず、精製土器全体の衰退・消滅過程という視点から検討する必要がある。今回NBPW出現以降に設定した三段階を従来の区分論に対応させると、NBPW前期に第一段階が、NBPW後期前葉から中葉に第二段階、後葉に第三段階が相当する。

本稿ではいくつかの限られた遺跡の資料をもとに検討するにとどまったが、NBPW出現以降の精製土器の衰退は段階的に進行していることが今回の検討によって明らかであり、より細分の方向性を模索しながら精製土器の展開の推移を見極めていく必要がある。

五 おわりに

以上、NBPWの検討を中心にして、NBPWの出現から消滅にいたる過程について考察を行ってきたが、本稿で取り上げた以外にも検討すべき資料は多く、今後の検討の方向性を示し得たにすぎない。NBPW前期と後期の土器様相は大きく異なるが、前者から後者への変化の過程はNBPW・粗製GWも含めて大きな問題である。また、PGWや精製土器に組み合わさる赤色系軟質土器など、検討すべき資料も多く、今後の課題としておきたい。

冒頭にも記したように、NBPWは前一千年紀の北インドを特徴づける精製土器として、多くの意義を持っている。NBPW前期と後期では分布域が異なっており、かつNBPW前期には北インド西半部に分布するPGWと北インドを東西に分けていたが、NBPW後期には北インド各地にNBPWが広がるようになる。こうした現象は当該時期の北インドにおける社会的動向と深く関わるものと考えられるが、特に当該時期は都市が成立し発展する時期にあたり、そうした社会変化に伴う地域間交流および地域統合が背景にあることが想定できる。また、NBPWが拡散する一方で精製土器が衰退していく状況は、精製土器への志向性が消失していく社会的状況を示唆している。このように、精製土器の消長には当該時期の社会的背景が大きく関わっている可能性が高く、精製土器の変遷を時空間軸上に位置づけ、その評価を模索していくことが必要であろう。

本稿を作成するにはあたっては、T・N・ロイ氏の研究を参考させていただくとともに、網于善教・高橋隆博・米田文孝諸先生からご指導を頂きました。また、以下の方々から資料の実見にあたってご高配賜り、貴重なご教示・ご助言を賜りました。末筆ながら、ご芳名を銘記して深謝申し上げる次第です。

赤塚 亨、太田宏明、大谷宏治、鬼頭 彰、小磯 学、小西正捷、近藤英夫、宗臺秀明、深野信之、正岡大実、山崎元一、D.K. Ambashtha' R.S. Bisht' P. Callieri' Mahmood-ul-Hasan' K.C. Nauriyal' D.K. Singh' N.K. Sinha' G. Verardi (敬称略) 五十音・アルファベット順)

〔註〕

- ① NBPW出現以前の精製土器の様相についてはすでに検討しており、ここで(II)とするのはその統編という意味合いにおいてである。
上杉彰紀「北インドにおける精製土器―彩文灰色土器と黒縁赤色土器を中心に」『インド考古研究』第一八号、一九九七年。
- ② NBPW自体はビータ遺跡の発掘調査においてJ・マーシャルがすでに確認していたが、NBPWとして明確な定義づけを行なったのはウィーラーとクリシュナ・デーヴァである。
Krishna Deva & Wheeler, R.E.M., 1946, Appendix A "Northern Black Polished Ware". *Ancient India*, no.1: 55-58.
- ③ こうした見解は、多くの研究者によって指摘されているが、その代表としてウィーラーの文献を挙げておくことにする。
Wheeler, R.E.M., 1959, *Early India and Pakistan*. Thames & Hudson, London.
- ④ 上杉彰紀「前二千年紀の北インドにおける土器の変遷」『インド考古研究』第一六号、一九九四年。
上杉彰紀「北インドにおける精製土器―彩文灰色土器と黒縁赤色土器を中心に」『インド考古研究』第一八号、一九九七年。
- ⑤ 上杉彰紀「北インドにおける精製土器―彩文灰色土器と黒縁赤色土器を中心に」『インド考古研究』第一八号、一九九七年。
- ⑥ Sahi, M.D.N., 1974, Stratigraphical Position of the NBP ware in the Upper Ganga Basin and its Date. *Puratattva*, No.7: 91-94.
- ⑦ Roy, T.N., 1983, *The Ganges Civilization: A Critical Archaeological Study of the Painted Grey Ware and Northern Black Polished Ware Periods of the Ganga Plains of India*. Ramchand Vidya Bhawan, New Delhi.
- ⑧ Roy, T.N., 1986, *A Study of Northern Black Polished Ware Culture: An Iron Age Culture of India*. Ramchand Vidya Bhawan, New Delhi.
- ⑨ 網干善教・高橋隆博編『マハート遺跡発掘調査概報一九九一〜一九九九年度』関西大学文学部考古学研究室、二〇〇〇年。
- ⑩ BRWに共通する器種・器形を持つ赤色系硬質土器もBRWに含める。これらのマハート遺跡で出土したBRWと赤色系硬質土器との間の色の差異は、単に焼成時の窯内における配置の違いに由来すると考えられるからである。したがって、典型的なBRWとは異なるが、BRWの系統に属するものとして考えておきたい。
- ⑪ ただし、BSWにはNBPWにもBRWにも共通しない加飾性の高い器種が存在する点には注意すべき点である。
- ⑫ Srivastava, K.M., 1996, *Excavations at Piprahwa and Ganwaria*. Memoirs of the Archaeological Survey of India, No. 94, ASI, New Delhi.
- ⑬ 報告書の記載によると、黒色磨研土器は器面調整がNBPWほど丁寧で

はなく、NBPWのような器面の光沢がないとされる。報告中では黒色磨
研土器とBASWを並置して記述していることから、両者は同一範疇に含
まれるものと考えられる。

⑭ Narain, A.K. & T.N. Roy, 1977, *Excavations at Rajghat* Vol. II, Banaras Hindu University, Varanasi.

⑮ 報告書では、粗製NBPWと粗製GWが一括して報告され、両者の分別
については記載されていない。

⑯ キャリネットハンディーとは主に煮沸具として用いられた器種で半球形
の体部から鋭く屈曲して内傾する口縁部からなる。

⑰ スタンプ文には円形の圏線の内側に珠文を施したものと、円環を接続し
て配置しその中央から上方に向かって伸びる軸状の部分および軸上端に配
置される半円環状の部分から構成されるものがある。また、赤色土器のキ
ャリネットハンディーにもいわゆるタウライン文を表現したものもある。

こうしたスタンプ文はラーシガート遺跡だけでなく、他の同時期の遺跡
(例えばゾーンク遺跡)などでも確認されているが、スタンプ押捺による
加飾方法は精製土器の消滅以降の時期においてより本格的に用いられるよ
うになる。

⑱ Narain, A.K. & T.N. Roy, 1968, *The Excavations at Prahadpur*, Banaras Hindu University, Varanasi.

⑲ Lal, B., 1954, Excavation at Hastinapura and Other Explorations in the Upper Ganga and Sutlej Basins 1950-52. *Ancient India*, Nos. 10-11: 5-151.

⑳ ハスティナープラ遺跡で出土したNBPWはタキシラー遺跡などの編年
観をもとに前六〜三世紀に位置づけられたが、その後の研究によってNB
PW後期(前三・二世紀頃)に位置づけられることとなった。筆者はイン
ド政府考古局中央遺物保管所において実見する機会を得たが、本文中に記
したようにNBPW前・後期双方の資料が含まれていることを確認した。
ただし、主体となるのは粗製GWも含めてNBPW後期のものと考えられ
る。

㉑ Sharma, Y.D., 1955-56, Past Patterns in Living as Unfolded by Excavations at Rupar. *Lalit Kalā*, 1-2: 121-129, Lalit Kara Akadami.

Ghosh, A. ed., 1990, An Encyclopaedia of Indian Archaeology, Vol. II. E.J. Brill, Leiden.

㉒ Marshall, J.H., 1951, *Taxila: an illustrated account of archaeological excavations carried out at Taxila under the orders of the Government of India between the years 1913 and 1934*, Vol.1-3. Cambridge University Press, London.

Ghosh, A., 1948, Taxila (Sirkap), 1944-45. *Ancient India*, No.4: 41-84.
Sharif M., 1969, Excavation at Bhir Mound, Taxila. *Pakistan Archaeology*, No.6, The Department of Archaeology, Pakistan.

㉓ タキシラー遺跡はビル・マウンド・シルカップ・シルスフを代表とする
都市遺跡と多数の仏教寺院からなる複合遺跡群であるが、NBPWを代表
とする北インド系の土器はビル・マウンドおよびシルカップで出土してい
る。量的にはビル・マウンドが圧倒的に多く、シルカップでは限定的であ
る。

㉔ ビル・マウンド地区ではI〜IV期に比較的安定して北インド系の精製土
器あるいは赤色系軟質土器が出土しているが、同時に各時期ともに北西イ
ンド系系譜を持つ土器が明確に存在している。実見し得た資料ではないが
I期のNBPW以外の黒・灰色土器の中にもNBPW波及以前の北西イン
ド系系譜を持つものが含まれている。本稿で図示した資料にも、NBPW
以外では北西インド系譜のものが含まれている可能性がある。ここでは器
形の類似性から北インドとの関係を指摘しつづけておきたい。

㉕ Lal, B.B., 1949, Sisupalgarh 1948: an Early Historical Fort in East-ern India. *Ancient India*, No.5: 62-105.

㉖ Thapar, B.K., 1964, Prakash 1955: A chalcolithic site in the Tapti valley. *Ancient India*, Nos. 20 & 21: 5-167.

㉗ Singh, Purushottam, 1994, *Excavations at Narhan (1984-89)*. Department of Ancient Indian History, Culture & Archaeology, Banaras Hindu University, Varanasi.

㉘ *Indian Archaeology - A Review* 1983-84, 1984-85

㉙ B.W.N. Dasguptaの祖形びんせいの見解はB・B・シャルド氏によつて一九五四年の没階で指摘されていたが、より豊富な資料の蓄積のもとに改

年ではK・M・シュリヴァスタヴァ氏によって改めて指摘されている。

③① ただし、ラージガート遺跡IA期のBSWに同様の突起を底部内面に持つ皿が出土していることは、そうした底部内面施文が古い段階から存在する可能性がある。

③② ただし、厚手化現象は成形技法の粗略化に起因する可能性が高く、粗製GWが主体化する現象からみても、精製土器の「粗製化」の傾向は否めない。

③③ NBPWがガンジス川中下流域で最初に創出されたとする見解があるが、少なくとも資料の検討においてはそうした見解の妥当性を認める根拠は見当たらない。NBPWの祖形となるBSWの主体化現象がガンジス川中下流域に限らず、ガンジス川中流域やヒマラヤ山脈南麓にも共通してみられることもそうした特定地域起源の可能性に根拠を与えていない。

Sahay, S., 1969, *Origin and Spread of the Northern Black Polished Ware. in Potteries in Ancient India* (Sinha, B.P. ed.), The Department of Ancient Indian History & Archaeology, Patna University: 146-154.

③④ PGWがNBPW前期に併行する時期にガンジス川中流域に主体的に存在していたことを示す例としては、アッラーハプル遺跡やソーンク遺跡を代表例として挙げる事ができる。これらの遺跡ではPGW後期からNBPW後期への層位的断絶を伴わない連続的推移が認められている。

③⑤ PGW後期には粗製GWの祖形となる可能性のあるものがみられる。今後の検討課題としておきたい。

Dikshit, K.N., 1973, *The Allahapur Evidence and the Painted Grey Ware Chronology. in Radiocarbon and Indian Archaeology* (Agrawal & Ghosh ed.), Tata Institute of Fundamental Research: 148-153.

Hartel, H., 1993, *Excavations at Sonkh: 2500 years of a town in Mathura District*. Dietrich Reimer Verlag, Berlin.

③⑥ Roy, T.N., 1983, *The Ganges Civilization: A Critical Archaeological Study of the Painted Grey Ware and Northern Black Polished Ware Periods of the Ganga Plains of India*. Ramanand

Vidya Bhawan, New Delhi.

Roy, T.N., 1986, *A Study of Northern Black Polished Ware Culture: An Iron Age Culture of India*. Ramanand Vidya Bhawan, New Delhi.

③⑦ 本稿では取り上げなかったが、北西インドではチャールサダ遺跡、ウデグラーム遺跡でもNBPWの出土が報告されている。アーンドラ・プラデーシュ州のアマラーヴァティー遺跡においてもNBPWの出土が報告されているが、同様にこの時期のものである可能性が高い。残念ながら、これらの地域・遺跡については資料の公表が行なわれておらず、かつ資料を実見する機会を得なかつた筆者には検討できなかつた。今後の検討課題としておきたい。

③⑧ 詳しくは拙稿を参照されたい。

上杉彰紀「紀元前後の北インドにおける土器の様相―サハート遺跡出土資料の検討を中心に」『インド考古研究』第二〇号、一九九九年。

③⑨ Hartel, H., 1993, *Excavations at Sonkh: 2500 years of a town in Mathura District*. Dietrich Reimer Verlag, Berlin.

挿図出典一覧 第一図・第一表 筆者作成、第二〜八図 各報告書をもとに筆者作成。

※なお、本文中で用いたアルファベット略号は以下のとおり。NBPW = Northern Black Polished Ware' aGW = Painted Grey Ware' BRW = Black-and-Red Ware' BSW = Black Slipped Ware' GW = Grey Ware' RW = Red Ware' OWR = Ochre Red Pottery.

(うゑすま あまのり 関西大学非常勤講師)